

宮田直彦のエリオット波動レポート

マーケット見通し(短期アップデート) 10 月 30 日 9:55AM 更新

[日経平均・TOPIX]

【当面の想定レンジ】(日経平均) 50,000～67,500 円
(TOPIX) 3400～4100

[NY ダウ・S&P500]

【当面の想定レンジ】(NY ダウ) 45,000～54,000 ドル
(S&P500) 6300～7820

[ナスダック 100]

【当面の想定レンジ】(ナスダック 100) 23,500～31,000
(ナスダック総合) 20,700～27,500

[米ドル/円]

【当面の想定レンジ】 140.000～160.000 円

[ドルインデックス(ドル指数)]

【当面の想定レンジ】 98.000～103.650

次回号は 11 月 6 日(金)に公開の予定です。

エリオット波動とは

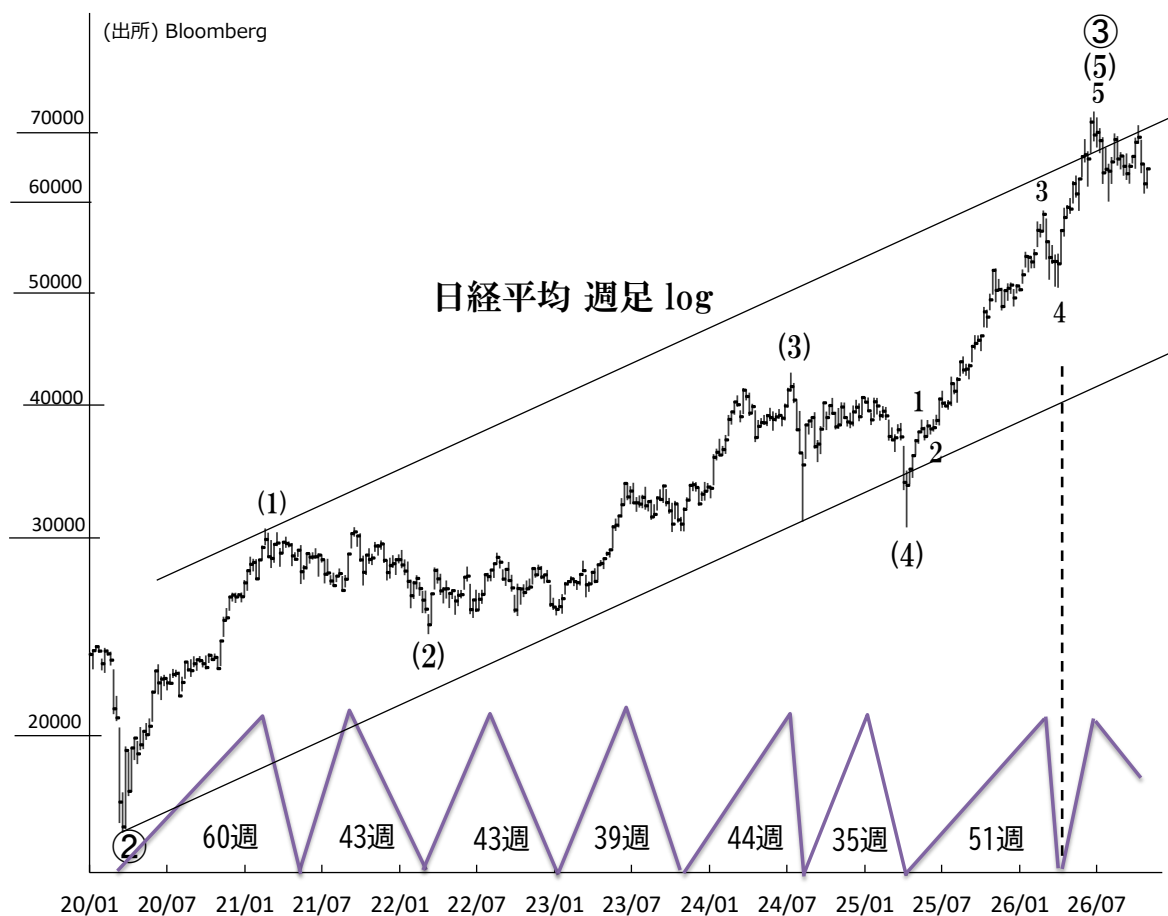
株式・為替動向を予想する心強いテクニカル手法

米国人ラルフ・ネルソン・エリオットが提唱した、今後の株式や為替など市場価格の動向を予想する手法です。相場は 5 つの上昇波と 3 つの下降波（合計 8 つの波）で一つの周期を作るパターンに従って展開するとされます。

このパターンは集団心理によるもので、数分から数十年といった様々な時間軸において観察されます。

フィボナッチ数列、黄金分割比率をチャート分析に初めて導入したのもエリオットです。

日経平均・TOPIX



【週足 エリオット波動分析】

72,831 円(6/22 高値)以来、プライマリー第④波の弱気相場が進行中です。

3 月末(50,558 円)からの週次サイクル(今週は 31 週目)は、弱気相場に特有の「レフト・トランスレーション(右肩下がり)」になる公算が大きいです(上昇期間よりも下げ期間が長くなります)。

現行サイクルでは、上昇期間はフィボナッチ 13 週(両端入れ)の長さでした。サイクル全体が 37 週～53 週(※1)であり、このことから、6 月 22 日(サイクルトップ)からの通算下げ期間は、24 週～40 週(5 カ月～8 カ月)と推定されます。ここからすると、日経平均は今年 11 月下旬～来年 3 月まで軟調な展開が続くと予想されます。

「レフト・トランスレーション」において、サイクル終点の価格がサイクル始点の価格を(通常は)下回ります。現行週次サイクルは少なくとも 50,558 円を下回るまで続くでしょう(※2)。ちなみに年末値が 50339.48 円未満なら 4 年ぶり年間マイナスとなり、週次サイクル起点の水準にもほぼ合致します。

(※1)週次サイクル期間(2020 年以降の補正後)は 45 週±8 週(37 週～53 週)。

(※2)サイクルの高値から安値まで、下げ率は 10%～26%(平均 17%)。今サイクル安値が 50,558 円未満であると仮定すると、現行サイクルの下げ率は 30%を超えることになる。



[TOPIX]

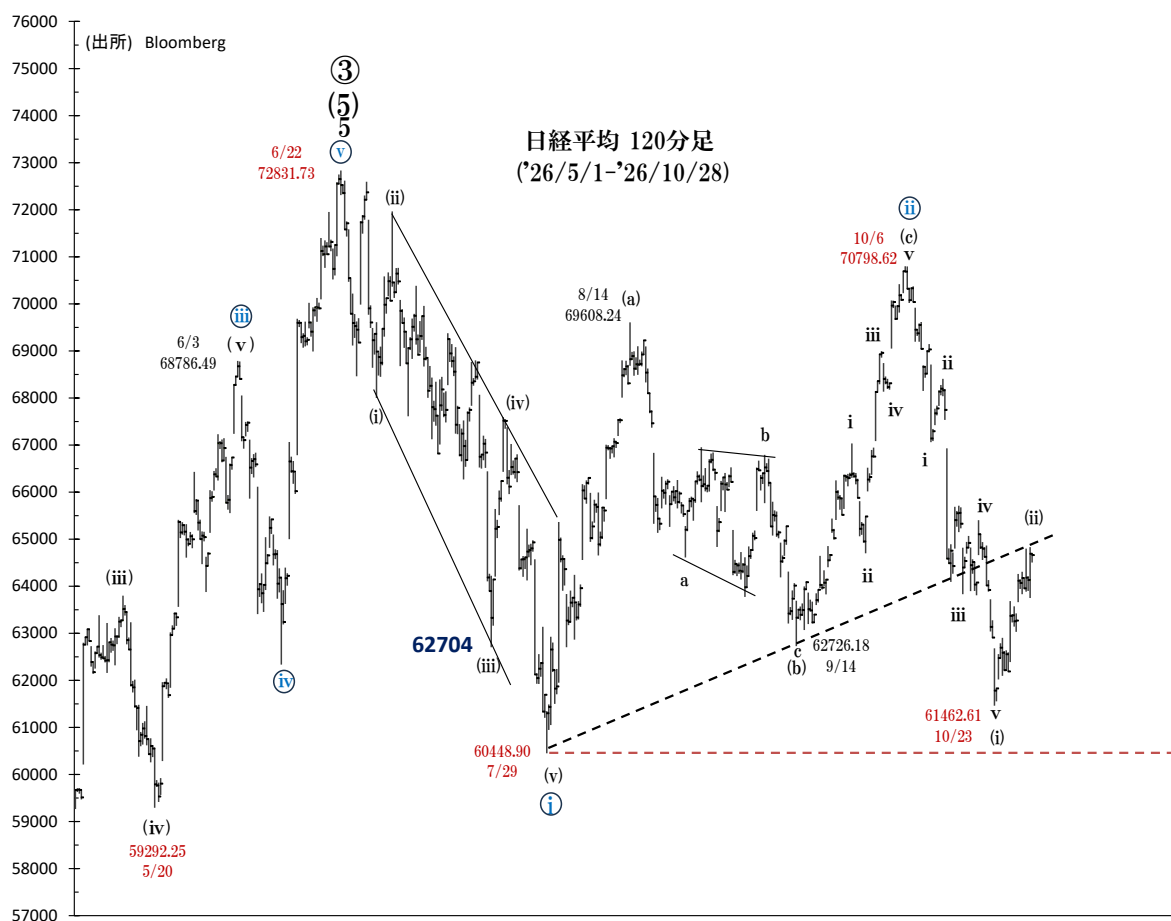
日経平均のプライマリー③波のピークは6月22日、TOPIXは8月14日に4220でピークを付けました(未確認による天井打ち)。以来プライマリー④波に入っています。プライマリー④波調整規模は最終的に、プライマリー第②波(2018年1月～20年3月)の下げ率(37.2%)と同等か、それ以上の大きさになると思われます。

チャートに破線で示したように、過去8カ月間のTOPIXパフォーマンスはほとんどゼロであり、多くの投資家に少なからずストレスが掛かっていると察せられます。

既に25年4月安値からのサポートラインを下回って推移していますが、今は下落モメンタムが再度強まるきっかけ待ちです。

(示していませんが)本日(30日)にも、25日MAと75日MAがデッドクロスします(クロス水準は4064付近)。当該デッドクロスは25年5月末以降で初めてであり、それは追加的な弱気シグナルになり、次は3880(8/3安値)を試すでしょう。

今後3880を下回る動きは、200MA(29日終値時点で3884)の下方ブレイクも意味します。200日MA割れとなれば、25年5月以降で初めての事です。



[日経平均・120分足]

70,798 円(10/6 高値)から、マル iii 波による下げトレンドが進行中です。

61,462 円(10/23 安値)からのリバウンド[ミヌエット級・第(ii)波]の戻りレンジとして、第(i)波の iv 波領域 [63,807 円-65,404 円]が想定されます。この想定レンジ内で 29 日の高値(64,831 円)は付けており、7 月安値からの旧サポートライン(今後のレジスタンス候補)に達しました。第(ii)波が完了してもおかしくありません。

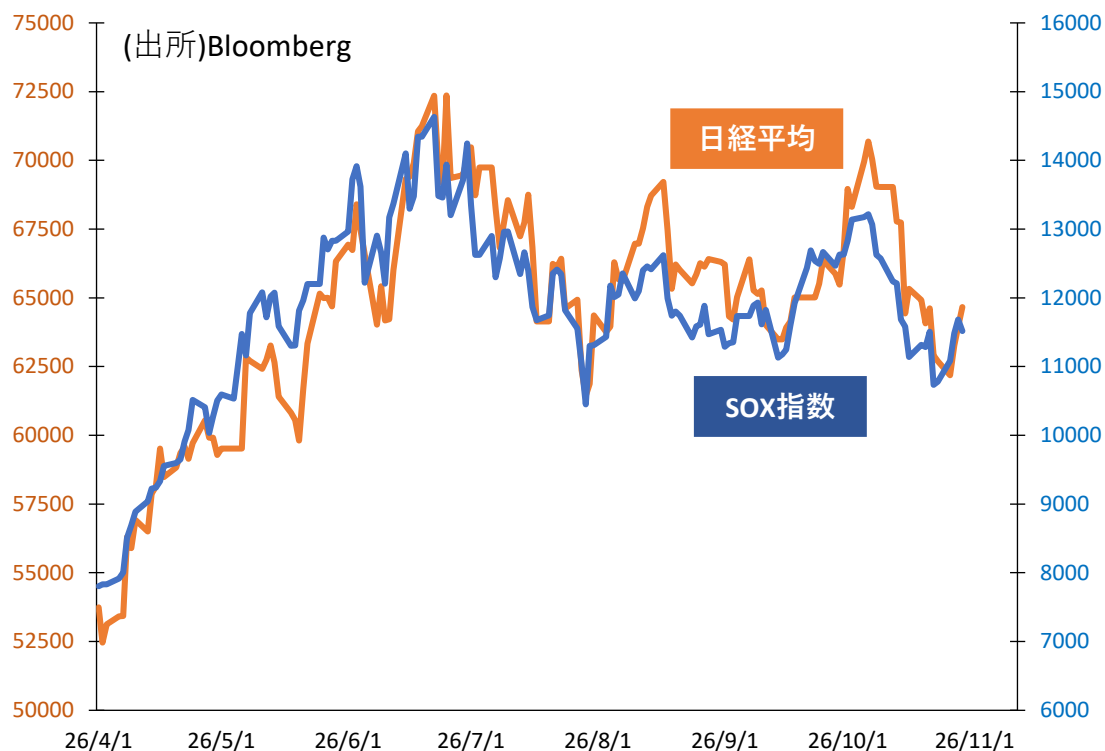
第(ii)波完了後には、マル iii 波中第(iii)波「サード・オブ・サード」による急落局面を迎えるでしょう。

マル iii 波の下げ幅は、控えめにみてマル i 波と同じスケール(1 万 2382 円幅)が想定され、この場合の下値目標は[58,415 円]です。

通常はマル i 波の長さに対し 1.618 倍がマル iii 波の長さであり、ノーマルな目標値は[50,763 円]です。前述のように、現行週次サイクル完成時期(11 月～来年 3 月)に、日経平均は 50,558 円を下回ると予想されます。今後は週次サイクルとマル iii 波が、同時に終了する可能性があります。

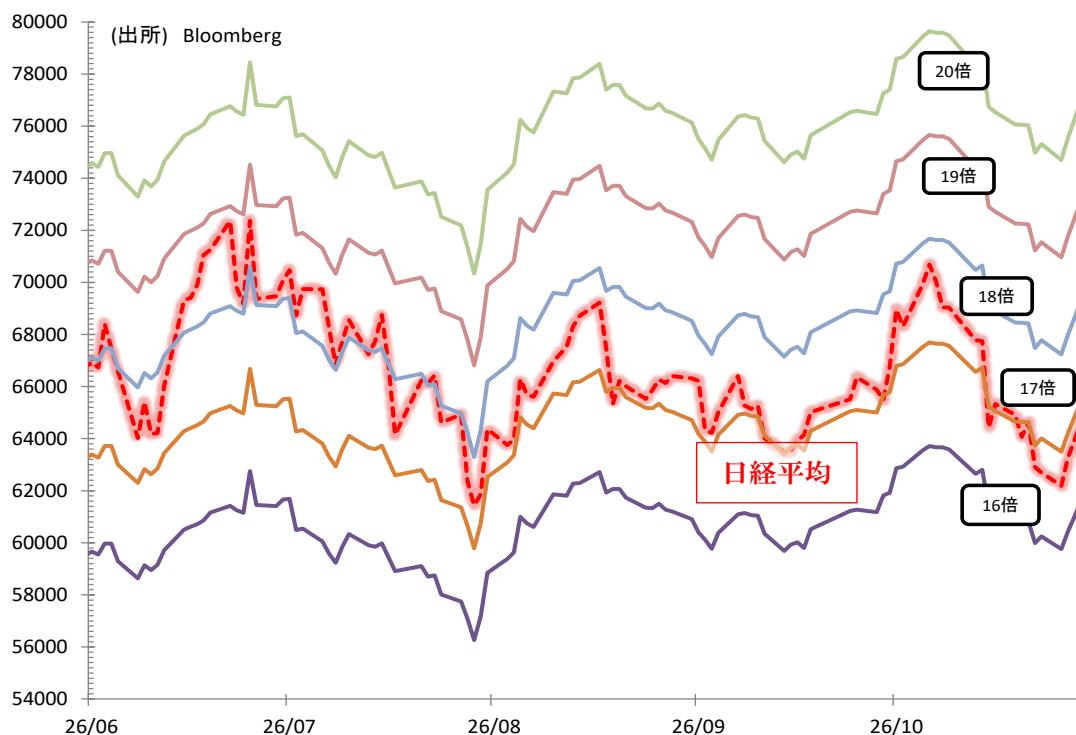
日経平均と SOX 指数

日経平均と SOX 指数は互いにシンクロしています。近いうちに 7 月安値を下回る展開を予想します。



[予想 PER 別の日経平均水準]

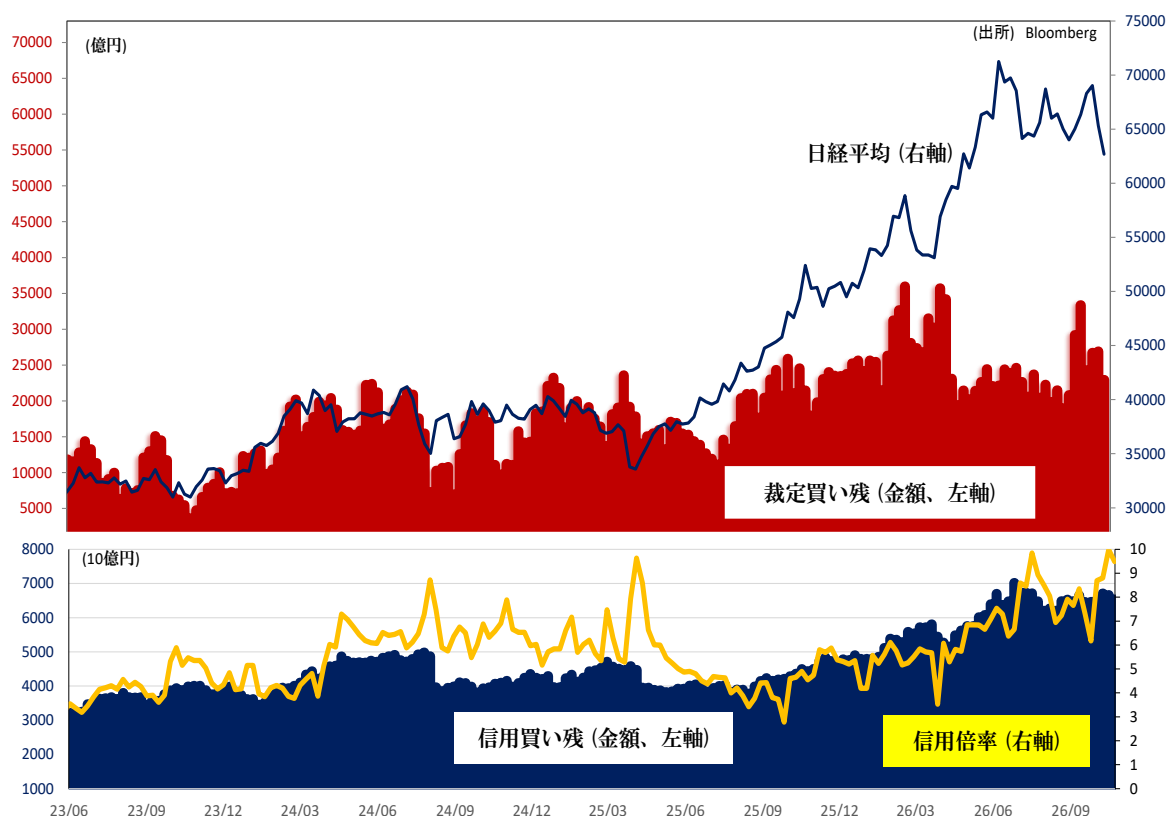
10 月 29 日の日経平均予想 PER は 16.79 倍、予想 EPS は 3851 円。過去最高は 3982 円(10/6)です。



[裁定買い残と信用買い残] (10月23日時点)

10月第3週(19～23日)に日経平均は4.02%下落し、23日には約3カ月ぶりの安値を付けました。この週は裁定解消の取引が増えたため、裁定買い残高は3週ぶりに減少しました。

なお信用倍率(金額ベース)は、前週の9.99倍(2005年以降で最高)から9.48倍へ、4週ぶりに低下しましたが、ヒストリカルに高水準であることに変わりありません。



NY ダウ・S&P500



【NY ダウ 30 日足 エリオット波動分析】

NY ダウは、4 月下旬からの「メガホントップ」天井パターンからの下放れが続いています。

最初の下降波(マル i 波)は 50546 ドル(10/1 安値)で完成し、そこからはマル ii 波のリバウンドです。

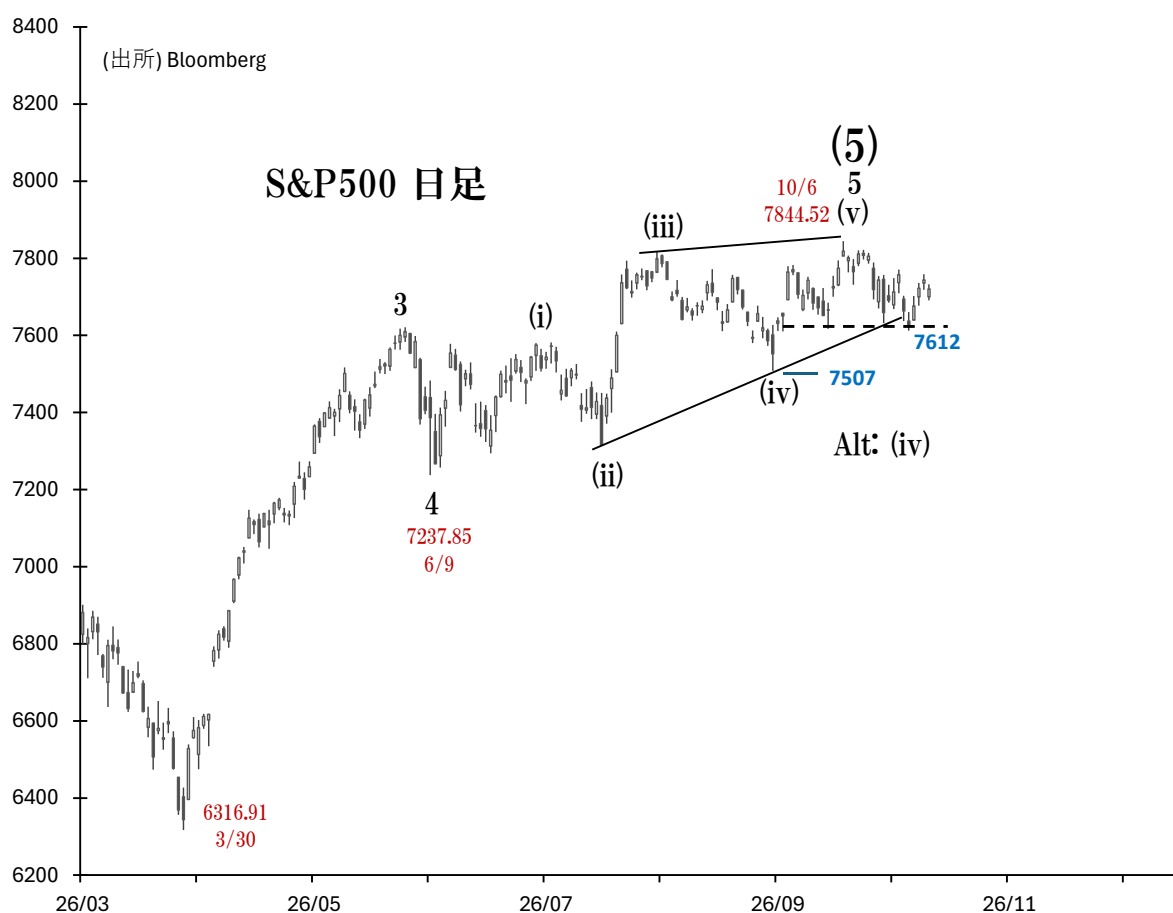
マル ii 波のメドは、マル i 波の 50%-61.8%戻り[52,645 ドル-53,140 ドル]が適当です。

22 日高値(52,927 ドル) は想定レンジ内で付けており、マル ii 波は完成したかもしれません。

マル ii 波のリバウンド完成後には、マル iii 波下落が続くことが想定されます。

200 日 MA(現在 50,547 ドル)を終値でブレイクすると、3 月からの上昇の半値押し[49,900 ドル]、3 月からの上昇に対する 61.8%押し[48,757 ドル]などを目指すでしょう。

なお第(iii)波自体は、より大きな弱気に発展する可能性があります。



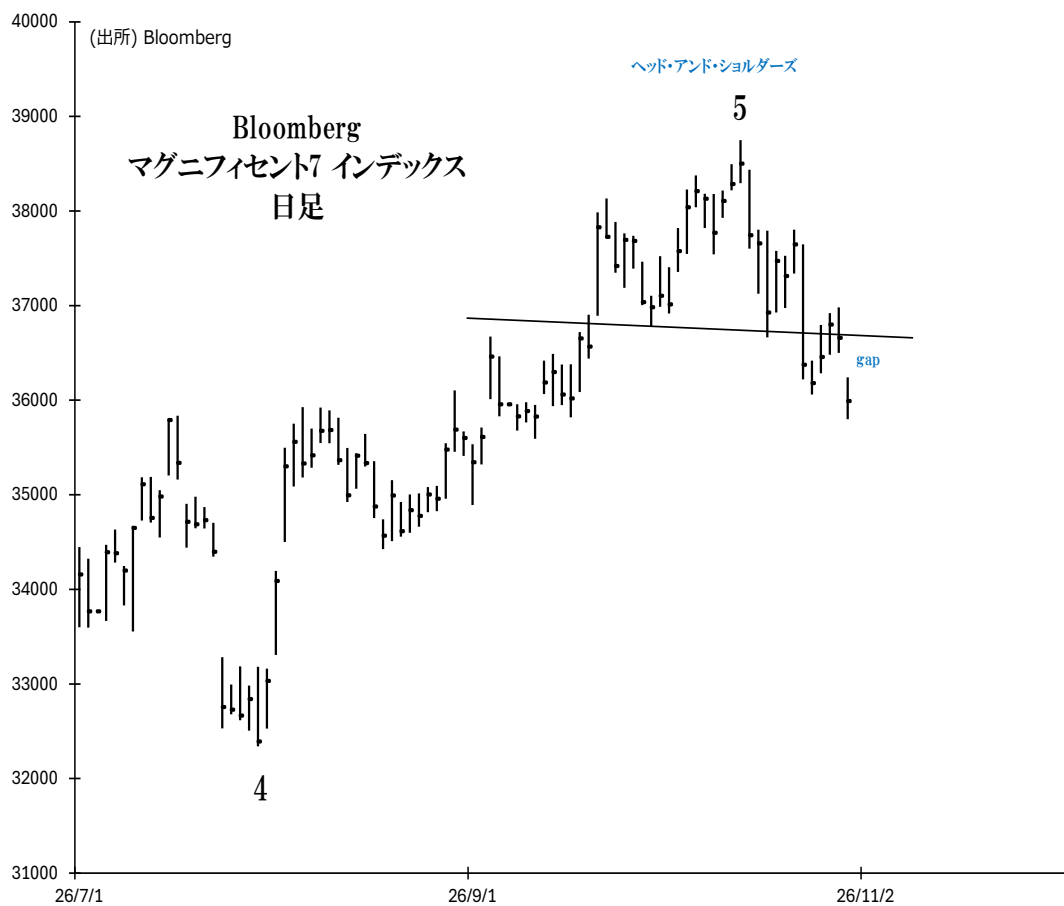
【S&P500 日足 エリオット波動分析】

10月6日の高値(7844)を以て、25年4月安値以来の第(5)波完成が完成した可能性があります。この見方は、SOX 指数の潜在的な弱さによって裏付けられているようです。

6月安値のチョッピリーな波形は、天井パターンの「エンディング・ダイアゴナル」とみられます。この見方によると、遠からず 7237(6月安値、ダイアゴナル始点)に向けての急落となるでしょう。

7612(10/23 安値)を終値で下回ると、9月中旬からの「ヘッド・アンド・ショルダーズ」完成を確認し、弱気トリガーが発動されます。この場合は早々に 7507(9/16 安値)を試すでしょう。7507 を割り込むと、上記のように 7237 を目指す展開が想定されます。

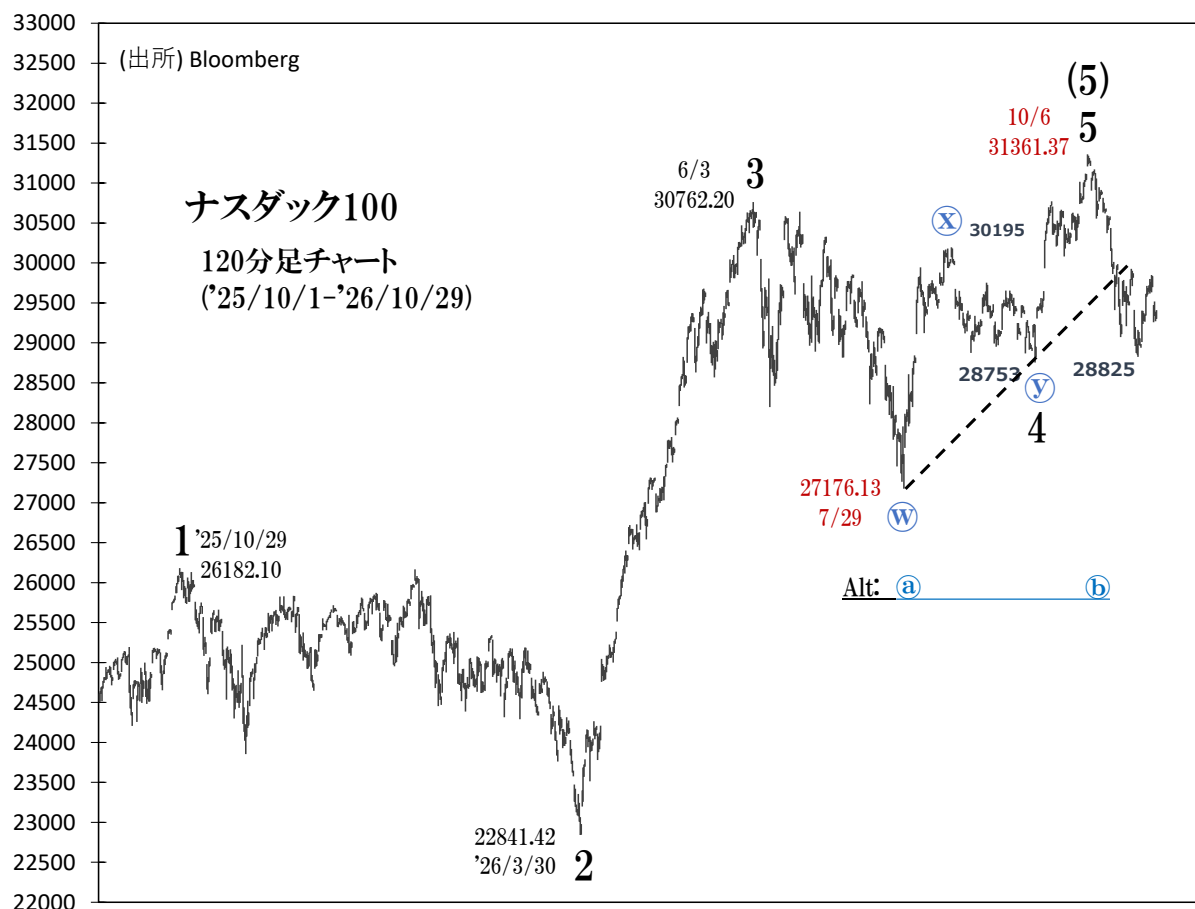
一方 7507 を維持する限りにおいて、上昇第(v)波の可能性は残されています。このケースではあと1回の高値更新を以て天井を付けるでしょう。



[ダウ輸送株平均]



ナスダック 100



【ナスダック 100 時間足 エリオット波動分析】

28,753(9/16 安値)からの上昇マイナー5 波は、31,361(10/6 高値)で完了したとみられます。

28,825(10/23 安値)からのリバウンドは、29 日の高値・29,848 を以て完成した可能性があります。

この見方通りなら、近々28,825 を下回り、28,753(9/16 安値)も早々に割り込むでしょう。

(オルタナティブカウント、Alt)

インターミディエイト第(5)波におけるマイナー第 4 波が「フラット」で展開しており、27,176(7/29 安値)からの上昇マル b 波は 31,361(10/6 高値)で完成しました。そこからのマル c 波は 27,176 を早々に試すとみられますが、26,182 を割ることはありません。

ただし 26,182 を一時的にも下回れば、今がマイナー第 4 波という見方は却下され、本格的なベアマーケット入りを確認します。

米ドル/円



【月足・エリオット波動分析】

日米実質金利差から導かれる米ドル/円の水準は、現在 1ドル=144-145 円程度です。

さらに、購買力平価からの妥当な円相場は OECD 算出の GDP ベースで 1ドル=97 円～103 円です。

短期的にも長期的にも、日本円の過小評価が続いています。

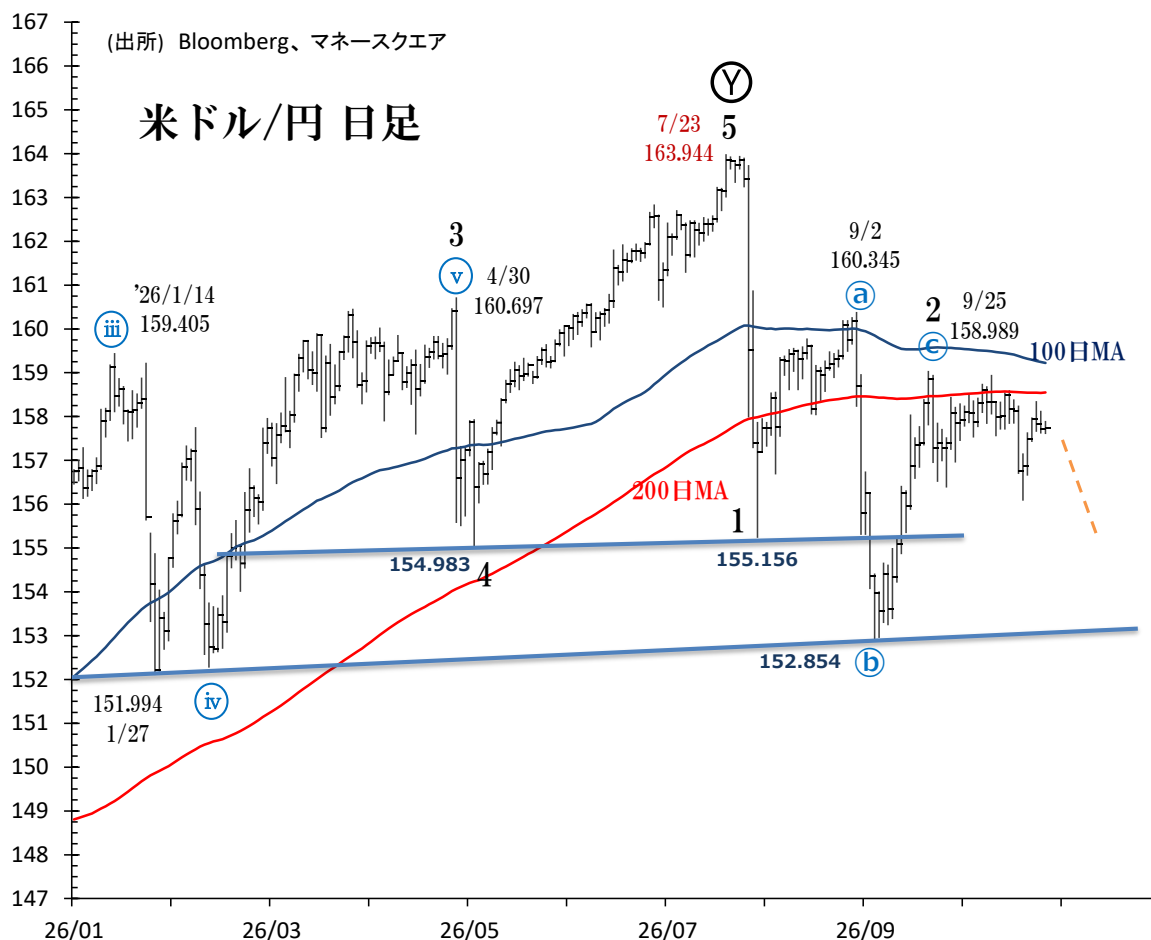
163.944 円(7/23)を以て通算 5 年間の円安①波[ウェッジ]は完了した、とみられます。ウェッジ内の副次波は、次のように相互に美しい比率を示しています。

(C)波の長さ÷(A)波の長さ=0.703、(E)波の長さ÷(C)波の長さ=0.703

この先は数年間にわたる円高になるでしょう。上記のように、長らく日本円はその実力に比べ過小評価されてきましたが、今後は実力に見合った適正な水準が模索されていくと思われます。

7 月末の日米協調円買い介入は、円安の限界水準(160 円台前半)を明示しており、もはや積極的な円売りの動機は失われたといえます。今後は次第に円高傾向が強まっていくでしょう。

筆者は今後数年内(2028 年?)に、1ドル=120 円-125 円を付けてもおかしくない、とみています。それは歴史的なレンジ[80 円-160 円]の中値に相当し、かつて「黒田シーリング」と言われた水準でもあります。



【日足 エリオット波動分析】

(想定しているような)強い円高はまだ起きていません。それでもドル/円はこの1カ月間、200日MAで上値を抑えられ、日本円の年初来パフォーマンスは主要通貨間で上位に位置づけています。消去法的とはいえ、日本円は選好されています。

AI・半導体株ブームの終焉と世界的な株安の連鎖が、現実味を帯び始めていると思われます。そんな中で、今後「リスク回避の円買い」が強まる可能性は高い、とみています。

158.989円(9/25)から、第3波(ドル安・円高)に入った可能性がある、と引き続きみています。

第3波により、「複合型ヘッド・アンド・ショルダーズ」のネックライン＝152円処が近々試されるでしょう。

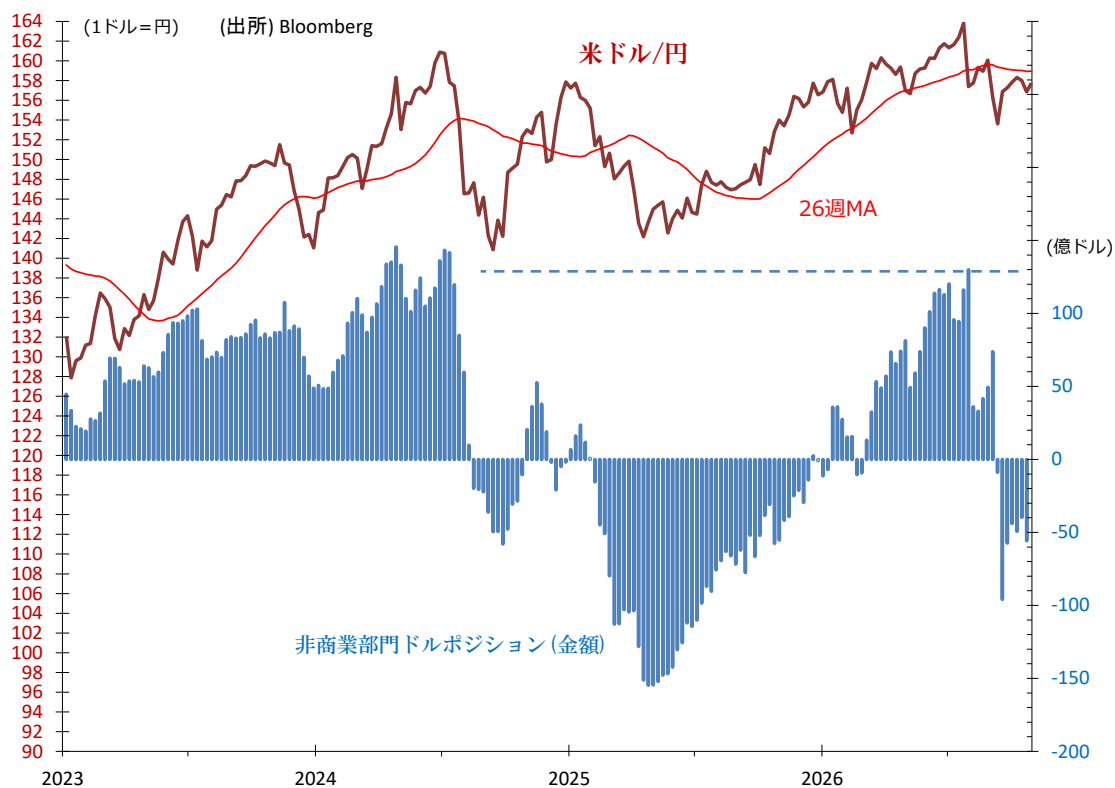
152円処は、25年4月(139.577円)からのドル/円上昇の半値戻り[151.910円]に相当し、今年1月27日の安値151.994円でもあります。

心理的節目の150円も視野に入り、その直下には61.8%戻り水準[149.070円]が控えています。

複合パターンに基づくターゲットは、①145円-146円、②141円です。

金利差からのドル/円推計値

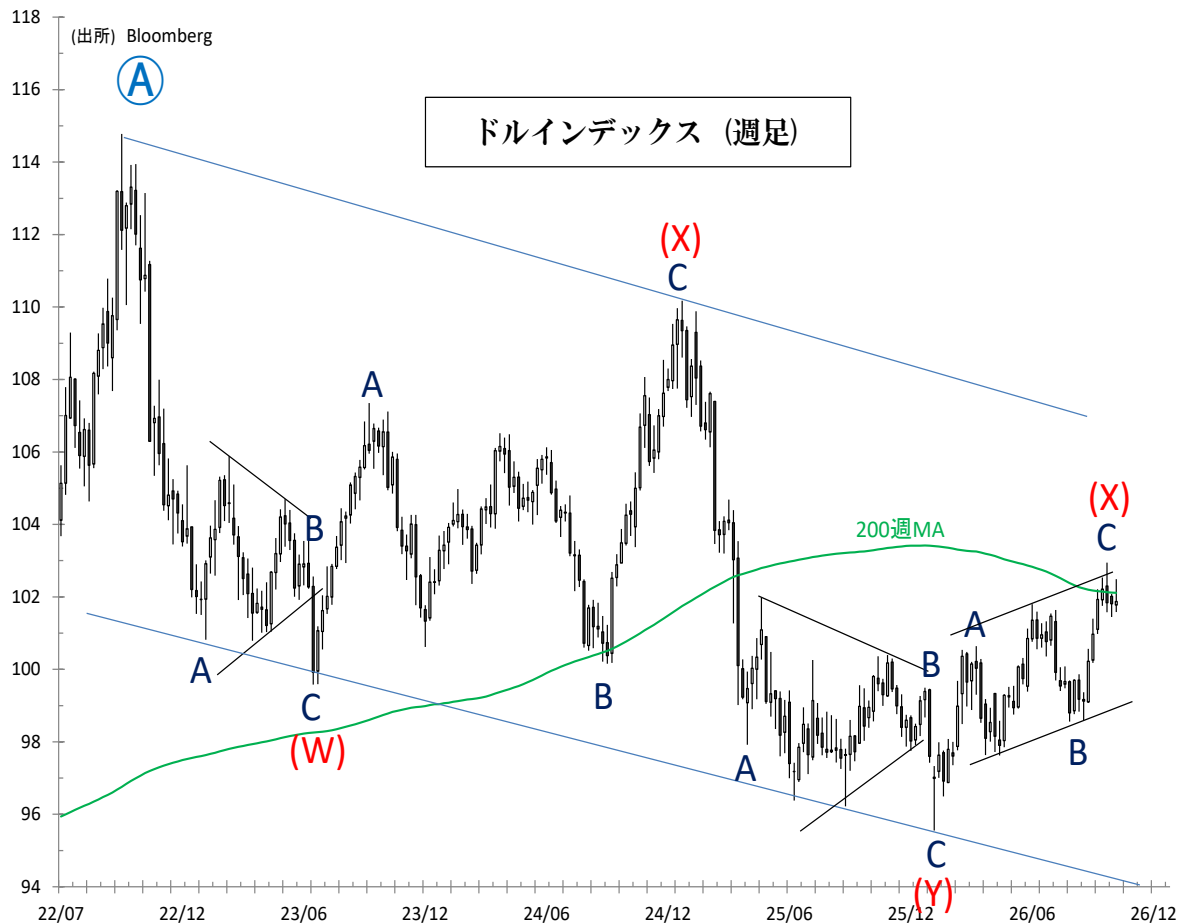
足元、日米実質金利差からのドル/円推計値は[144.289円]です。



円買い持ち高がやや拡大 (2026 年 10 月 20 日時点)

IMM 通貨先物市場で投機筋(非商業部門)による円買い持ち高は、前週の 39.71 億から 55.70 億ドルへ拡大しました。

ドルインデックス (ドル指数)



【エリオット波動分析】

今年1月からのドル高・(X)波はA-B-C編成ですが、そのうちB波「フラット」は98.557(8/21)で完了し、以降のドル高はC波に位置付けられます。

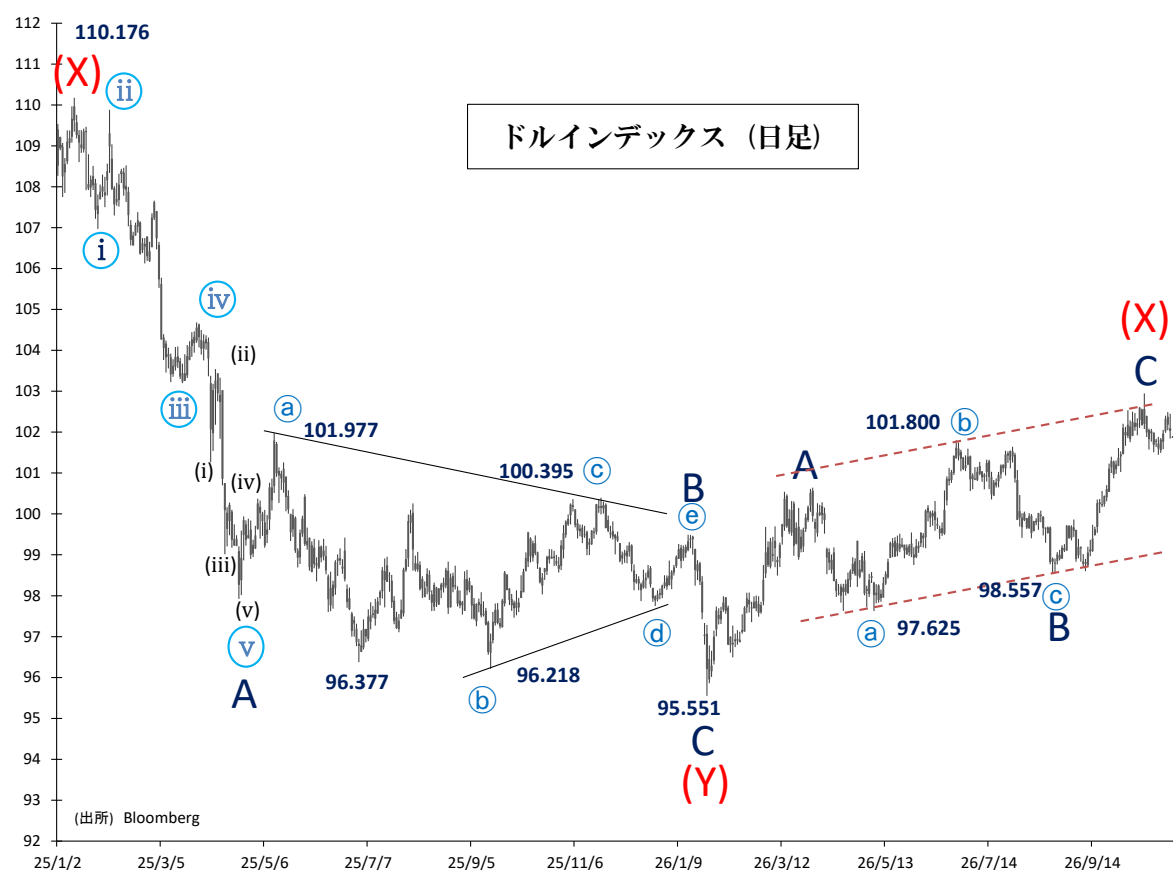
10月14日高値(102.945)は(Y)波(25年1月～26年1月)の半値戻り[102.864]に一致しています。それに加え、200週MAも強いレジスタンスとして機能しているようです。なお200週MAは低下し続けており、長期のドル安トレンドを示唆しています。

需給面においても、投機筋によるドル買い持ち高は再び歴史的な水準に拡大しています。この点からも、C波及び(X)波はいつ終わってもおかしくなく、そうであれば、ドル安トレンドの再開が近いと思われます。

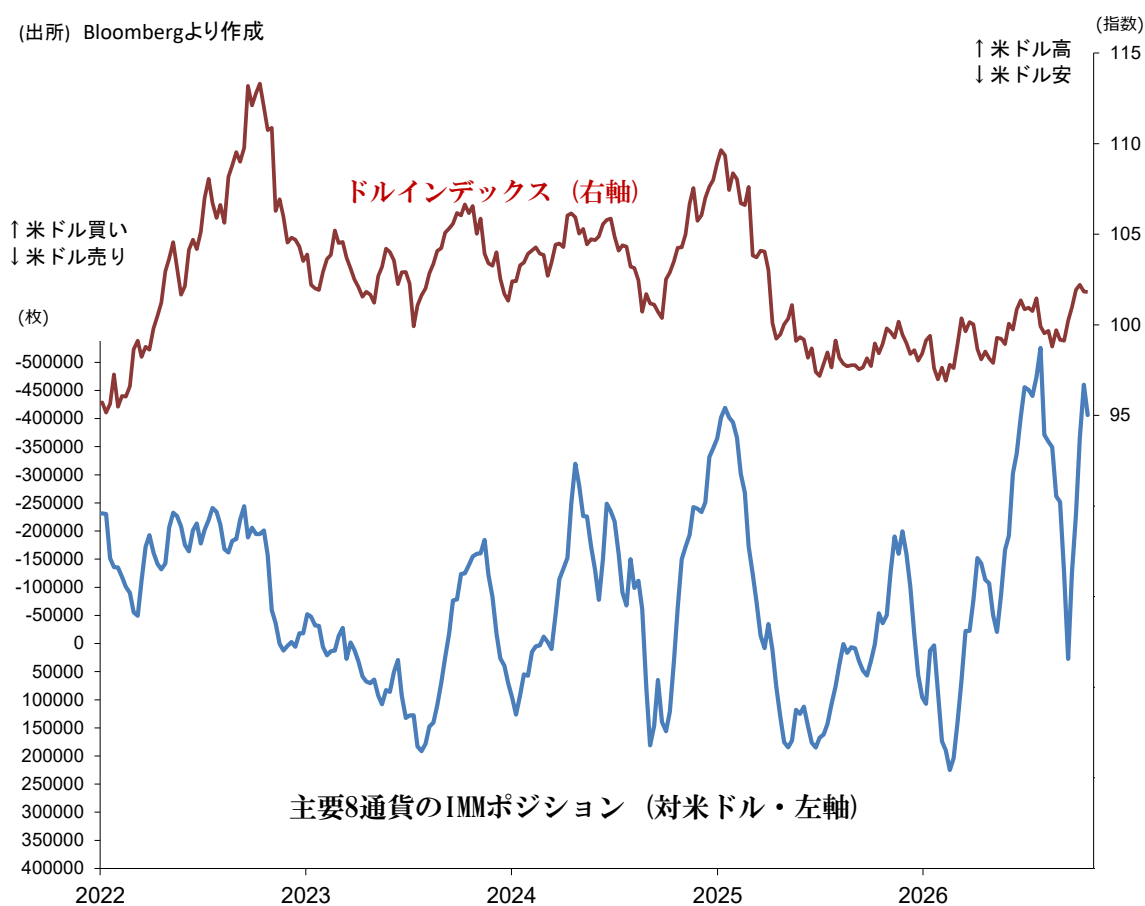
一方、ドル高基調がまだ続くなら、[103.654](A波とC波が等しく上がる水準)が節目となります。

投機筋のドル合成ポジション買い持ちは高水準を維持(2026年10月20日時点)

投機筋によるドル合成ポジションのドルの買い持ちは、40万6343枚。前週46万231枚から減少しましたが、引き続きドル買い持ち高は過去最大級です。



(出所) Bloombergより作成



※当レポートは、情報提供を目的としたものであり、特定の商品の推奨あるいは特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。

※当レポートに記載する相場見通しや売買戦略は、ファンダメンタル分析やテクニカル分析などを用いた執筆者個人の判断に基づくものであり、予告なく変更になる場合があります。また、相場の行方を保証するものではありません。お取引はご自身で判断いただきますようお願いいたします。

※当レポートのデータ情報等は信頼できると思われる各種情報源から入手したものです。当社はその正確性・安全性等を保証するものではありません。

※相場の状況により、当社のレートとレポート内のレートが異なる場合があります。

当社サービスに関する注意事項

・取引開始にあたっては契約締結前書面をよくお読みになり、リスク・取引等の内容をご理解いただいた上で、ご自身の判断にてお願いいたします。

・当社の店頭外国為替証拠金取引および店頭 CFD 取引は、元本および収益が保証されているものではありません。また、取引総代金に比較して少額の資金で取引を行うため、取引の対象となる金融商品の価格変動により、多額の利益となることもありますが、お客様が差し入れた証拠金を上回る損失が生じるおそれもあります。また、各金融市場の閉鎖等、不可抗力と認められる事由により店頭外国為替証拠金取引および店頭 CFD 取引が不能となるおそれがあります。

・店頭外国為替証拠金取引、店頭 CFD 取引における取引手数料は無料です。

・当社が提示するレートには、買値と売値に差（スプレッド）があります。流動性が低くなる場合や、天変地異または戦争等による相場の急激な変動が生じた場合、スプレッドが広がる場合があります。

・店頭外国為替証拠金取引に必要な証拠金額は、個人のお客様の場合、取引総代金の 4% 以上です。法人のお客様の場合、取引総代金に、金融先物取引業協会が算出した通貨ペアごとの証拠金率（為替リスク想定比率）を基に当社が算出した証拠金率を乗じた金額となります。為替リスク想定比率は、金融商品取引業等に関する内閣府令第 117 条第 27 項第 1 号に規定される定量的計算モデルを用い算出します。なお、証拠金率（為替リスク想定比率）は変動いたします。店頭 CFD 取引に必要な証拠金額は、取引総代金の 10% です。

金融商品取引業 関東財務局長（金商）第 2797 号

【加入協会】日本証券業協会 一般社団法人 金融先物取引業協会
株式会社マネースクエア